

### 大塩名物「山塩」

**江戸時代の塩** 江戸時代米沢街道の大塩には塩井があり、塩泉を煮詰めて作る「山塩」づくりが産業となっていた。

寛永20年(1643)の小物成納(このもの)・種税・塩後(塩)は「一塩拾石五斗七升、塩後、是は大塩作り納三拾石拾五斗三升六斗六分、一軒当たり三斗六升(3.6×18リットル)＝64.8L、3.6×約19kg＝約68.4kg、36軒分では約2,323.2L、2,462.6kgの山塩を納めていたことになる。寛文5年(1665)の軒数が98軒、人口729人(記録される(大塩組土記)ので、大塩村の約3割は塩後を課され塩づくりに関わっていたと理解できる。

享和3年(1803)から文化6年(1809)にかけて編纂された「新編会津風土記」には、大塩村の項で村中二塩井(故名「づか」として、塩泉を涌出する「塩井」があったこと)が入って述べられる。「塩井」は、「大塩川」「北大塩川」東西一帯、東の井筒間一丈三尺、西ノ井筒間一丈五尺、共二深一丈余(東井戸は周囲が約3.9m、西井戸は周囲が約4.5m、共に深さ約3m)と記されており、1m前後の方形井戸と見ることができ、同書の「大塩村図」にはそれぞれの「塩井」の奥に、奥間1間半行3間程の製塩小屋と思われる建物があり、東側には天祥橋を担ぐ二人が描かれており、江戸時代、「山塩」作りの様子をつかえる貴重な資料となっている。

**山塩づくり** さて江戸時代の山塩の製法となると、詳細はよくわかっていない。明治16年塩製事業の再興計画(北塩原村史)では、塩水溜小屋、分離神屋、薪小屋、塩池溜小屋、塩釜釜屋などが置かれ、窯には径約2m、深さ約15cmの鉄鍋をのせておこす計画であった。一方大塩住人から明治32年に提出された明治天皇への献納願いに伴う記録(北塩原村史)によれば、直径約1m深さ21cmの鉄鍋を土窯にかけ、塩水約630Lを一昼夜煮て90Lとし、桶に移して翌朝までおく、そして流水のごとく進んだ塩水を別の鍋(土鍋)に移して10時間煮ることで、「塩釜斗五升」(27L、28.5kg)、「塩斗三升」(5.4L)を作ることができることと記される。一度煮た塩水を一晩煮き不純物を沈殿させ、上澄み液から製塩する工夫がされていた。大塩での山塩づくりは、その後昭和の戦中(戦後)にかけて小規模におこなわれたもの、安定した塩の供給がおこなわれるようになるとすたれていった。

**山塩づくりの復活** 平成17年、北塩原村商工会は、特産品作りに着手した。大塩地区では山塩づくりの復活が試みられ、平成19年塩山塩企業組合が設立。その後試行錯誤を繰り返して、平成21年虚空蔵公園駐車場に移動し、今につながる山塩づくりの方法や体制が整えられた。

山塩の原料となる温泉塩は、大塩薬師温泉の温泉神社近くで湧出する涌泉水を使用。タンクに入れて工場へ運び、貯水施設に保管する。塩泉は薪窯で煮込む。窯での火入れは、1:煮詰め、2:塩結晶ができる直前まで煮る、3:鍋をかえて塩結晶ができるまで煮詰めるの計3回おこなわれる。その後、塩と水分(にがり汁)を脱水して分離し、乾燥をおこなう。乾燥した塩は食味を悪くするため手作業で不純物を取り除き、容器に詰められようく商品となる。

この1サイクルには1週間から10日かかり、時間と手間のかかる仕事である。だが歴史と期待を背負っている現代の塩づくり職人たちは、日々、挑戦をこめた仕事を続けている。

**滋味・地味・自味** 山塩はクリンターフという地層に埋もれた太古の海水が、ふたたび地中で溶け出し源泉となった大塩の温泉塩水を使用している。まさに大地に根ざした自然の恵みがおおすわけをいただき、人の手が加わった滋味あふれる「山塩」なのである。

### 北塩原村



発行・お問い合わせ  
**北塩原村教育委員会**

福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字  
下六部屋敷2134番地  
電話：0241-223-5236  
刊行：平成29年3月31日

### 北塩原村の「歴史の道」

# 会津米沢街道



**人々の歩みの積み重ねと地域の歴史**  
会津と米沢を結ぶ道については、史料の記載や遺跡の分布から、室町時代には米沢道・米沢路が存在していたことを推測できる。戦国時代には東北を代表する名家・蘆名家と伊達家が領を削る歴史の舞台になった。

**中世の米沢道** 長祿3年(1459)とされる塔寺八幡宮長帳には「はたくちや当所御せ七十余に於て御立候...」とあり蘆名家家臣上氏がたてうち(伊達川、松原峠のこたか)へ出兵したことが記される。その後明和3年(1744)、文政3年(1803)、永正3年(1506)などに領国をまたいだ戦闘が起きている。この頃、蘆名家盛高が穴沢復家に松原を守らせるようになったことだが、後世の史料(新編会津風土記・異本塔寺長帳・会津旧事考)に記載される年代は一致しない。

蘆名家盛氏(1521-1580)の代には永祿7年(1564)、8年に伊達連宗・輝宗の兵が松原へ攻め込んでき、(山道会津元和八年老人覚書原本)には、松原村にいた大沢新十郎が伊達勢を撃退したことや、冬季の雪中での戦いの様子が記されている。永祿9年、両家は盛氏の後継盛興の妻を伊達家から迎えることに関与し修復された。

天正6年(1578)と見られる伊達輝宗の書状には、蘆名家への使者が大塩にいる事を記しており(伊達文書)、大塩は当時宿場であったことがうかがわれる。松原周辺が再び不穏となるのは天正12年(1584)、蘆名家主盛隆の死去とその後継に亀若丸が幼くして擁立された後のことである。これにより蘆名家は陰謀の竹家密約・伊達勢を鮮明にし、伊達家との関係を悪化させる。おりしも同村、伊達家の家督を継いだのが伊達政宗であった。

**伊達政宗の会津侵襲** 伊達政宗は翌年の天正13年(1585)5月3日、松原峠を越えて会津松原に侵入し、略奪してまわった。

この件は後に伊達康実が記した「政宗記」には、前日に申首益から入田村に入った伊達家臣原田宗時が負けたことが同日には政宗の陣に伝わり、政宗が米沢から軍勢を呼び寄せている間に、松原の蘆名家は大塩へ向かい、城に籠って守りを固める(「会津の人数は大塩に精籠り、城は堅固に抱抱へけり」(政宗記))。この城は現在(H29)発掘調査が進められている柏木城跡が該当すると考えられ、「伊達勢も同日に、大塩の上の山まで動きけれども、山中にて道一筋なれば備を立べき地形なし。大山(を)隔て後陣は松原を引連れざれば、倉戦には及ばず...」(政宗記)として松原に引返していった。松原から米沢道へ越えた政宗軍は、大塩を眼下にしつつも、山中の狭い道の中で陣形を取ることが出来なと見て、柏木城に籠る蘆名家との戦闘を避けて米沢道を通り松原まで引き返したようだ。

**上杉謙信の頃** 慶長3年(1598)に会津に入った上杉謙信の重臣、直江兼続が記した書状にも「横川 中山 猪苗代 高柳 大塩 松原 となき 関」の「町中肝煎」に対し「伝馬二匹あい調子なきなり」(慶長5年)八月八日直江兼続判物)と命じており、大塩と松原は道の「駅」とされていたことがわかる。

**米沢街道** 米沢道が「街道」として整備されたのは江戸時代のこと。慶安2年(1649)、会津藩主保科正之が江戸幕府に報告したなかに米沢街道があり、会津藩内と關東を結ぶ会津街道五筋の一つであった。米沢では会津街道と呼んだ。米沢街道は、城下会津若松を発し塩川、熊倉を経て、大塩・松原(北塩原村)、綱木・関(米沢市)を通り米沢に至る14里(約56km)を結び、当時各所に整備された宿場や一里塚はところどころに今も残る。北山・大塩・松原の歴史の多も、この往來を歩む人々の足跡が積み重なって来ている。

今日では、歴史街道として始点と終点がかかるように、会津米沢街道と呼ぶこともある。

### 大塩歴史さんぽ

